

## 巻頭言

### 犬との生活

### Life with dogs

森田 寛

Yutaka MORITA

我が家には2頭の犬がいる。ゴールデンレトリバーのカン太（6歳）とアキラ（2歳）である。

私の毎日は朝5時頃に起きて犬と散歩することから始まる。今は真冬で6時30分を過ぎないと真っ暗なので、しばらくはお茶を飲んだり新聞を読んだりして時間をつぶしてから、日の出とともに散歩に出かけている。犬たちは夜は居間のケージの中で寝ているが、朝そこから出してやると喜んで大騒ぎし、「散歩に行こう」と声をかけるとまた大騒ぎし、散歩から帰って朝食をやるとそれをあつという間に食べてしまう。もう少しゆっくり楽しんで食べればいいのにといつも思う。このようにして“散歩に行つて食事する”という彼らの1日の最大の楽しみは1時間程で終わってしまう。

彼らは血のつながりもなく、性質も正反対であるが、仲良くやっている。カン太は従順でこちらのいうことをよくきく“おりこうさん”である。カン太をお茶大に連れて来た時には保健管理センターのスタッフや学生達に可愛がってもらった。一方のアキラは“やんちゃ坊主”で靴下やハンカチを食べてしまつて苦しくなつてあとで吐き出すということは何度も繰り返している。先日は食卓に置いてあつた千円札を3枚食べてしまつて妻をあきれさせた。

さて、犬と人との違いは何であろうか。犬はいびきもかくし、夢を見て寝言も言う。また、人の言葉も理解できるし、鳴き声の変化としっぽの振り方で自分の意思を明確に表現できる。先日、医者が診察時にしばしば調べる膝蓋腱反射（膝関節のところをハンマーで叩くと膝関節が伸展する）を彼らに試してみたところ人の場合と全く同じ反応が起こつた。犬は確かに人の子供のように学校を卒業して独立して家を出て行つたり稼ぐようになったりはせずいつまでも幼児のようではあるが、そのような人もおり、これも犬と人との本質的な違いではない。このように考えてくると私には犬と人との違いがよくわからなくなる。

しかし、唯一犬と人で違いがありそうな点がある。それは犬は基本的に楽天的で自分の死や死後の家族のことなどで頭を悩ませないだろうということである。人よりもはるかに寿命の短い犬が、生死の問題といういくら考えてもなかなか解決のつきそうにない大問題で思い悩むことに時間を使わずに済んでいるのは大変喜ばしいことである。その代わりに飼主の方が犬の生死問題で苦しむことになる。

最近心配なのは彼らの老後である。脳卒中になつて体が不自由になるのではないかと、アルツハイマー病になつて同じところをぐるぐる回るようにならないか、あるいは股関節が悪くなつて歩けなくなるのではないかなどと心配している。

生活工学は最終的には人の快適で、安全な生活をめざす学問だと理解しているが、生活工学の先生方には犬のことも気にかけて、犬用の車椅子や歩行補助装置などを考案していただきたいと願っている。

（保健管理センター長）